読みがたりむかし話資料にみる近畿周縁部方言の敬語運用素描

酒井雅史

1. はじめに

日本語諸方言の敬語運用については、加藤（1973）で指摘された「敬語の西高東低」や、井上（1981）による「敬語体系全体の丁寧語化」といった特徴が広く知られるところである。また、全国的な運用の地域差のほか、宮治（1987）や辻（2009）、西尾（2015）において関西方言の敬語運用に関する特徴も明らかにされている。

酒井（2015）では、自然談話資料にみられた敬語運用について、必ずしも話し手の規範通りの運用がなされているわけではなく流動的な側面もあることについて指摘されている。日本語諸方言の敬語運用について明らかにしようとする場合、同一手法によって集められたデータをもとに分析を進める必要があるが、話題や登場人物の統制という点で自然談話資料では等質なデータをもとに対照することは容易ではない。酒井（2019）では、この点を考慮に入れた分析を行える談話的資料として『読みがたり各県のむかし話』（以下,『むかし話』資料。）を用いて、関西方言における素材待遇形式の分布および、素材待遇形式をどの程度用いるかということも地理的連続性の中で捉えられることが明らかにされている。

本稿では、『むかし話』資料を用いて、酒井（2019）で扱われている関西方言の周縁に位置する方言における素材待遇形式の分布について概観する。また、関西方言とあわせて、素材待遇形式をどの程度用いるかに関する分布についてみる。

以下、2 節で『むかし話』資料について紹介したのち、3 節で分析について述べ、4 節で『むかし話』資料に現れた素材待遇形式の分布についてみる。5 節はまとめである。

2.『むかし話』資料について

本稿で分析に用いる『むかし話』資料は，1973～1978 年に刊行された『各県のむかし話』の改訂版として 2004～2006 年に刊行されたものである。『むかし話』資料は，各地に伝わる伝承や伝説を語ったものを再録した資料である。他の昔話を収めた資料と比べて，各府県内での地域的な偏りが出ないように万遍なく昔話が集められており，全国的な分布を対照するための談話資料として扱えるものである。また，編集の段階で地域の人をはじめ教育委員会等多くの人間が関わり，各地の方言らしさが損なわれないよう編纂されている。以上の特徴を持つ『むかし話』資料は，各県およそ同じ分量の話が収められており（40～70 話 ; 60,000～80,000 字程度），地域特有の話とともに，都府県間で共通する話も収められている。

『むかし話』資料は，むかし話を語るという日常談話における使用実態の一部を反映した資料として位置づけられ，文末表現の定型性について全国的な分析を行っている日高（2013, 2018）のほか，大阪方言のノダ相当形式ネン・テンの成立を検討した野間（2014），関西方言の素材待遇形式の分布について述べている酒井（2019），存在動詞の分布を概観している

酒井（2021）やアスペクト形式の分布を扱った酒井（2022）などがある。

本稿では，各地方言の実態を反映した談話の一つである『むかし話』資料を用いて，酒井（2019）で確認された「素材待遇形式をどの程度用いるか」ということに関する地理的連続性についてみることを目的とする。

3. 分析について

本稿では、酒井（2019）で扱った関西方言と地理的に連続する周縁部の方言を分析対象とする。具体的には、兵庫以西の鳥取県と岡山県、滋賀県の東に位置する岐阜県および北に位置する福井県に、石川県と富山県を加えた 6 県に見られた素材待遇形式について扱う。各県で分析対象とした資料の分量は、表 1 の通りである。

表 1　分析対象とした分量

府県	地域	話数
鳥取	因幡	22
	東伯耆	21
	西伯耆	19
	計	62
岡山	備前	12
	備中	20
	美作	5
	計	37
福井	嶺北	52
	嶺南	22
	計	74
石川	加賀	20
	能登	22
	計	42
富山	呉西	32
	呉東	29
	五箇山	6
	計	67
岐阜	飛騨	19
	美濃	43
	計	62

分析にあたっては、酒井（2019）と同様に、まず，『むかし話』資料で分けられている各府県内の地域区分ごと[1]に有標形式と無標形式を集計した。集計の際は，地の文と会話文に分けて用例を収集した。用例の収集作業は基本的に資料に現れた動詞述語全てを拾い，いずれの素材待遇形式が使用されているかを確認するという方法を採った。ただし，(1) のように 1 文中で動詞述語が複数現れても同じ動作主の一連の行動を描写しているものは，主節末の動詞述語を 1 例として数えている[2]。

(1) おしょさんは、いまのなかいに、いまのなかいにと、いそいでもちを出いてくる

1)　『むかし話』資料では，それぞれの話の再話地の地図が記載されている。本稿では，『むかし話』資料に記載されている地点と既存資料の方言区画とを照らし合わせて地域区分を設けた。

2)　以下，本発表で引用する例文の出展を【話の題：府県（府県下の地域)】の形で用例の末尾に示す。また，動作主を□で囲み，分析対象の動詞述語をゴシック体で示す。なお，（　）で示したものは，理解のために筆者が補った文脈や動作主などを表す。

と、火ばちのはいをきれいにならして、そん中にもちをずらっと**ならべなさった**げな。　【こぞさんの使い：西伯耆】

4.『むかし話』資料に現れた素材待遇形式

本節では『むかし話』資料に現れた素材待遇形式について、4.1 節で関西周縁部方言として分析対象とした鳥取県、岡山県、福井県、石川県、富山県、岐阜県の『むかし話』資料における素材待遇形式の使用についてみたのち、4.2 節で有標の素材待遇形式の使用率に関する分布を関西方言との関りから述べる。

4.1. 関西周縁部方言における素材待遇形式の使用状況

分析対象とした 6 県の『むかし話』資料で用いられていた素材待遇形式の調査結果を示すと表 2 のようであった。表 2 では、使用数が限られていたオ～ニナル、ナンス、ヤンス、サンス、ンス、ヤス、ラス、サル、マッシ、サッス、～テゴザル、～テミエル、～テオイデルを「その他」、ヤガル，クサル，サラスを「その他の卑罵語」としてまとめて示している。

表 2　『むかし話』資料における素材待遇形式

府県	地域	待遇場面	レル	ナサル	ナハル	ハル	ナル	ンサル	ッシャル	ッセル	ヤル	ス	テヤ	ナレル	ヨル	その他	その他の卑罵語	計	φ	有標率（%）
鳥取	因幡	会話文	9		1											7		17	48	26.2
		地の文	34	3	1		2											40	349	10.3
	東伯耆	会話文	3		11		1											15	41	26.8
		地の文	16		34		14									9		73	232	23.9
	西伯耆	会話文			7											1		8	26	23.5
		地の文	7	11	9											6		33	293	10.1
岡山	備前	会話文	2	4				1	1									8	49	14.0
		地の文	2													3		5	343	1.4
	備中	会話文	2	6			1	17	4				6			1		37	88	29.6
		地の文	4					3	7				4			2		20	466	4.1
	美作	会話文	1	1				16										18	16	52.9
		地の文																0	108	0.0
福井	嶺北	会話文		3			4									3	1	11	68	13.9
		地の文		6	1											1		8	768	1.0
	嶺南	会話文			2												1	3	47	6.0
		地の文		2	1	1	2									1		7	377	1.8
石川	加賀	会話文	2						1							2		5	49	9.3
		地の文	2													1		3	549	0.5
	能登	会話文	2	2					2							1		7	68	9.3
		地の文	3	3								1				1	1	9	616	1.4
富山	呉西	会話文	1						28		2	1				1	1	34	51	40.0
		地の文	10			14			7							2		33	686	4.6
	呉東	会話文	4	3		2			8							1	1	19	20	48.7
		地の文	1															1	431	0.2
	五箇山	会話文									4					1		5	3	62.5
		地の文									3							3	81	3.6
岐阜	飛騨	会話文	1	4				1	14							1		21	14	60.0
		地の文		1								1		3		3		8	375	2.1
	美濃	会話文		3				11	2	2		2		2	1	3		26	47	35.6
		地の文	10					2		10		22			2	5		51	793	6.0

表 2 から、次のことが指摘できる。すなわち、(A) 各方言で主に用いられる素材待遇形式は異なる。関西以西の鳥取県・岡山県方言ではナサル系統のナハルおよびンサルが優勢な一方、中部・北陸方言の他の 4 県ではナサル系統の使用もみられるものの（ラ）レルおよびッシャルの使用が優勢な様子がうかがえ、岐阜県方言においてはッセルやスといった素材待遇形式の使用が目立つ。

また、表 2 からは、(B) いずれの方言においても地の文での有標の素材待遇形式の使用

率は低くい。また、地の文よりも会話文での方が有標の素材待遇形式の使用率が高いことが分かる。この点については4.2節にて関西方言における結果と合わせて触れる。

以下、(A) について各県下の用例について順にみていく。

鳥取県下では、因幡方言では（ラ）レル（2）が、東伯耆方言ではナハル（3）が、西伯耆方言ではナサル（4）が最も多く用いられている。

(2)（和尚さんは）すみぞめの衣を着て、みんなのおしょうさんのような金らんの衣でなしに、まことにみすぼらしいかっこうをして**行かれた**そうな。

【ネコの恩がえし（1）：因幡】

(3) 紋衛門さん（百姓）はなあ、とても、よう仕事を**しなはる**人でやあ、そっで、この人の畑はだいこでも、イモでも、なんでもようできてやあ、村の衆も紋衛門さんの畑は、村一番だわいちって評判しとったちゅうこった。

【紋衛門さんとミミズ：東伯耆】

(4) むかし、このへんに何かわからん化けものが出てきて、きみょうに方丈さん（和尚さん）が**食いころされてしまいなさる**お寺があっただって。

【ネコの恩がえし（2）：西伯耆】

岡山県下では、備中方言・美作方言でンサル（5）（6）が主流なのに対して、備前方言では他の素材待遇形式と比べて多く用いられるという結果ではなかった。

(5) そこへ行って、ポン、ポン、かしわ手を打ったら、ギーッいうて戸があいて、きれえな着物をきた女の人が**出て来んさった**。

(6)「いや、いや、うちの馬はくせが悪いんで、あんた（女に化けたキツネ）が**落ちんさっちゃあいけん**けんじゃ。」

【馬方さんとキツネ：美作】

また、『むかし話』資料では岡山県のみにテヤの使用がみられた。

(7)「なんの。化けもんぐらい平気ですらあ。おじいさんも、おばあさんも**おってじゃし**。」

【すからかっぽの瀬戸が浜：備中】

北陸方言の福井県および石川県は、福井県ではナサル（8）（9）が、石川県では（ラ）レル（10）（11）が最も多く用いられているものの、他の関西周縁部方言と比べると、有標の素材待遇形式の使用率が低い。

(8) 殿さんは、大男をにらんで**言いなさった**んですと。　【大男のもちつき：嶺北】

(9) てんぐは、ようこのお寺のおしょうさんと問答を**しなさった**。

【てんぐのつめあと：嶺南】

(10) むかしというても、おとのさんの**おられた**ころのことや。

【お銀小金：加賀】

(11) えらいぼうさまやったので、**いのっておられる**うちに、口のまわりにあわをふき、目玉のとびでたわろというのは、むかしからこの能登のあちこちでいたずらをして追いだされたこうらにコケのはえている大きなガンであることがわかってきたげと。

【ガンのこ石：能登】

富山県方言においては、上述の関西周縁部方言と異なり、呉西方言・呉東方言ではッシャル（12）が、五箇山方言ではヤル（13）が主に用いられていた。

（12）だけど、（天狗が）からかいに**こらっしゃる**わいね。

【かわいい声の天狗はん：呉西】

（13）ごぼさまがもうと**来やらん**もんじゃで、とうとが、（後略）。

【ごぼさまちがい：五箇山】

なお、呉西方言のみ地の文においてハル（14）の使用がみられ、さらに（ラ）レル（15）の使用が目立つ。

（14）だんなはんよわってしもうて**泣いてはった**れど、そう式も終わってうずもてしもうたがやとお。【子育てゆうれい：呉西】

（15）しばらくして、新しいかあさんがその家へ**こられた**そうじゃ。

【トンビになった子ども：呉西】

岐阜県方言は、他の方言に比べて県内での方言差がみられた。すなわち、飛騨方言では隣接すると富山県方言と同じくッシャル（16）が他の形式よりも多くみられるのに対して、美濃方言では、ンサル（17）、ス（18）、ッセル（19）の使用が多く用いられていた。

（16）「じゅうに入れてくとな、じいさは、じゅうくさいって**おこらっしゃる**。」

【サルむこ：飛騨】

（17）おじじがよわっちょると、おっさま（お坊さま）は、ふところんどこから小刀をとりださっせて、モミジのひと枝をけずり**はじめんさった**んやと。

【木ぼりのニワトリ：美濃】

（18）孫っこは、ゆうなびに、じぞうさまの赤いべべを作っては着せちょったで、いしなのじぞうさまは、どえらいべっぴんさんに**ならした**げな。

【海からござったじぞうさま：美濃】

（19）そしておてんとさまが**のぼらっせた**ころ、（後略）　【本殺し生殺し：美濃】

なお、岐阜県方言においては、他の方言では用いられないナレル（20）やヨル（21）が使用されていた。

（20）（和尚さんが餅を）「フウフウ。」って、ふきなれると、ふすまのかげから、（後略）

【おしょうとこぞう（三）フウフウこぞうとパッパッこぞう：飛騨】

（21）「ガエロ（カエル）め、おれがゴザの下は、はだかだということを**見ぬきよって**、おちょくるのやな。」【九べえとガエロ：美濃】

4.2. 素材待遇形式使用率の分布

酒井（2019）では関西方言の有標の素材待遇形式使用について次のことを指摘した。

（22）府県下の地域ごとの有標率を見てみると，《京・山城》から《湖南》《湖東》《湖北》にかけての地域で有標形式の使用率が高く，東海道および北陸道沿いの地域的な連続性が認められる。また，《湖西》《丹波》《丹後》といった隣接する地域で

同程度の使用率を見せる。　（酒井 2019：8）

4.1 節において、関西周縁部方言では有標の素材待遇形式使用率が低いことを確認したが、本節では、関西方言との地理的分布の状況についてみておく。酒井（2019）示した関西方言のデータと合わせて各地方言域ごとに素材待遇形式の使用率を示すと表 3 および図 1 のようになる。表 3 では会話文と地の文を比べた際、使用率の高い方を黒字白抜きで示している。なお、酒井（2019）のデータでは会話文の用例を対者／第三者待遇ごとに分けて集計していたが、ここでは一括して会話文として示している。

表 3　各府県における有標形式の使用率

府県	地域	待遇場面	有標率（%）
兵庫	但馬	会話文	33.8
		地の文	19.6
	播磨	会話文	18.2
		地の文	9.4
	丹波	会話文	55.6
		地の文	12.4
	阪神神戸	会話文	14.3
		地の文	3.6
	淡路島	会話文	10.3
		地の文	2.2
鳥取	因幡	会話文	26.2
		地の文	10.3
	東伯耆	会話文	26.8
		地の文	23.9
	西伯耆	会話文	23.5
		地の文	10.1
岡山	備前	会話文	15.5
		地の文	1.4
	備中	会話文	29.6
		地の文	4.1
	美作	会話文	52.9
		地の文	0.0
滋賀	湖北	会話文	30.7
		地の文	60.7
	湖東	会話文	28.3
		地の文	53.0
	湖西	会話文	16.0
		地の文	18.3
	湖南	会話文	10.3
		地の文	55.3
京都	京・山城	会話文	34.9
		地の文	60.4
	丹波	会話文	28.3
		地の文	14.4
	丹後	会話文	29.9
		地の文	18.1
大阪	大阪市・摂津	会話文	14.3
		地の文	13.7
	河内	会話文	20.9
		地の文	23.5
	泉北泉南	会話文	10.0
		地の文	18.3
奈良	北和	会話文	30.6
		地の文	30.8
	南和	会話文	16.2
		地の文	5.1
和歌山	紀北	会話文	6.3
		地の文	0.0
	紀中	会話文	7.4
		地の文	0.5
	紀南	会話文	13.3
		地の文	0.6
福井	嶺北	会話文	13.9
		地の文	1.0
	嶺南	会話文	6.0
		地の文	1.8
石川	加賀	会話文	9.3
		地の文	0.5
	能登	会話文	9.3
		地の文	1.4
富山	呉西	会話文	40.0
		地の文	4.6
	呉東	会話文	48.7
		地の文	0.2
	五箇山	会話文	63.0
		地の文	3.6
岐阜	飛騨	会話文	60.0
		地の文	2.1
	美濃	会話文	35.6
		地の文	6.0

図 1 から、「《湖西》《丹波》《丹後》といった隣接する地域で同程度の使用率を見せる。（酒井 2019：8）」といった分布は、鳥取方言の《因幡》《東伯耆》《西伯耆》も同様で、有標形式使用率に関する地理的連続性がみてとれる。一方、関西方言内の《京・山城》から《湖南》《湖東》《湖北》にかけての地域でみられた使用率の高いという地理的連続性は、隣接する福井県方言・岐阜県方言には見受けられない。関西以西の瀬戸内海側に位置する岡山県方言における有標形式の使用率は、関西以東・以北の福井県方言・石川県方言・富山県方言・岐阜県方言と同じ傾向となっている。

素材待遇形式の使用率については関西以西にはその地理的連続性が認められるが、関西以東・以北は断絶していることが指摘できよう。このことは各地方言で多く使用される素材待遇形式とその運用の在り方に関連のあることが示唆される。すなわち、素材待遇形式の使用率に地理的連続性が認められる《湖西》《丹波》《丹後》から《因幡》《東伯耆》《西伯耆》

にかけての方言ではナサル系統の素材待遇形式が用いられており、その運用の在り方も共通していることがうかがえる。一方、関西方言で高い有標率の地理的連続性が認められた《京・山城》から《湖南》《湖東》《湖北》では（ヤ）ハルが主に用いられるが、関西以東・以北の方言では、ッシャルや（ラ）レルなど（ヤ）ハルとは異なる系統の素材待遇形式の使用が観察される。そのため有標の素材待遇形式の使用率という点では地理的断絶があるのである。

ただし、表 3 をみると、高い有標率の地理的連続性が認められた《京・山城》から《湖南》《湖東》《湖北》では、会話文に比べて地の文における使用率が高いことが分かる。また、ここまで地の文における素材待遇形式の有標率をみてきたが、会話文では地の文とは異なる分布となる（図 2）。会話文における登場人物の発話には様々なものが含まれるが、登場人物間の対者待遇／第三者待遇の別や、(23) のような命令・依頼・勧めといった行為指示表現系の発話に素材待遇形式が共起するか／しやすいか否か、(24) にみるようなクダサルなどの授受表現類と素材待遇形式が共起するか／しやすいか否かなど、各地方言における待遇表現体系の違いが地の文に比べて現われていると考えられる。

(23) 行為指示系

a.「そりゃあ気のどくに。まあ家でよかったら**とまっていきなんせえ**。」
【半殺しかみな殺しか：因幡】

b.「この子さんは、なんでも長い名まえを**つけなはんせえ**。(後略)」
【長い長い名まえ：東伯耆】

c.「そうじゃろう。よういいんさった。ほんなら、こりょう**食べんさい**。」
【長い鼻　短い鼻：美作】

d.「そんなら、もういっぺん**のぞいてみんさい**。」【松山鏡：飛騨】

e.「あんたさんは、めしをくわんよめさんをほしがっておんなはるげなが、わしを**もらあてごしなはらんか**。(後略)」
【めしをくわん　よめさん（一）めしをくわん　よめさん：西伯耆】

f.「この洗い水三ばい**飲まっしゃい**。そしたら教えてやっちゃ。」
【舌切りスズメ：呉西】

g.「へだるけりゃ、ねご橋わたって、たなのだんごを**取ってきやーれ**。」
【トンビになった子ども：五箇山】

h.「さあさあ、そこのむすめさんとやら。一ぺんじぶんのすがたを**見てみんさい**な。」
【美濃の桃太郎：美濃】

(24) 授受表現類

a.「きょうは、あぶないところをよう**助けてくんなった**。」【浦島太郎：嶺北】

b.「さ、たんすも長持も、家のなかに**いれてくさっしゃれ**。」【イモほり藤五郎：加賀】

c.「ようねて**おくれんさった**かな。」【本殺し生殺し：美濃】

d.「ヒョイトコ**作ってくれっしゃい**か。」【だごの話（1）だごとヒョイトコ：呉東】

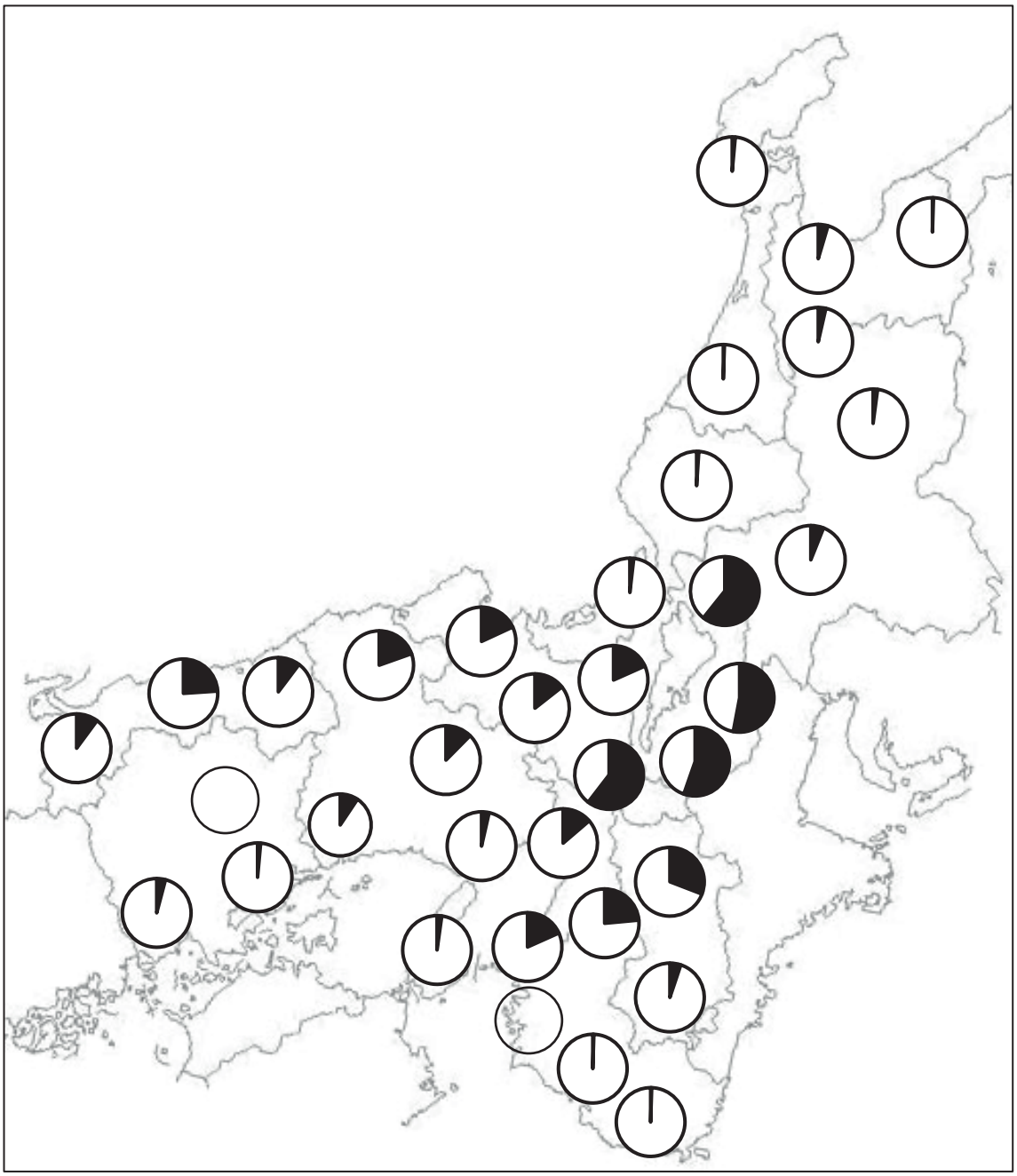

図１　有標形式の使用率分布（地の文）

このことは、各地方言で用いられる素材待遇形式とその運用の在り方の関係にくわえて、昔話を語る際の語りの在り方そのものに地域差があることも考えられる。関西周縁部方言については分析が及んでいないため可能性の指摘にとどまるが、各府県の運用に関する詳細な運用に関する観察を踏まえた分析は今後の課題としたい。

図 2　有標形式の使用率分布（会話文）

5. まとめ

本稿では、『むかし話』資料に現れた関西周縁部方言で用いられる素材待遇形式について触れた（4.1 節）。また、関西方言と合わせて有標の素材待遇形式の使用率に関する地理的分布について現時点で明らかとなった点について述べた（4.2 節）。宮治（1987）や辻（2009）、西尾（2015）など諸先行研究において、関西方言の素材待遇形式に関する特徴が明らかとなれているが、有標の素材待遇形式の使用率に関する分布からは関西方言の特殊性の一端も

垣間見えたと考えられる。ただし、『むかし話』資料にみられる素材待遇形式の運用をつぶさに分析するとともに、他の談話資料における使用もあわせて考えていく必要があろう。今後の課題としたい。

【付記】本稿は JSPS 科研費 26244024 および 20H00015，19K20788，20K13047 の成果の一部である。

参考文献

井上史雄（1981）「敬語の地理学」『国文学　解釈と教材の研究』26-2，pp.38-47，学燈社.

加藤正信（1973）「全国方言の敬語概観」林四郎・南不二男編『敬語講座 6　現代の敬語』pp.25-83，明治書院.

酒井雅史（2015）「滋賀県長浜市における素材待遇形式の運用―流動的運用とその要因―」『阪大日本語研究』第 27 号，pp.163-194，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

――――（2019）「関西方言における素材待遇形式の分布―読みがたり昔ばなし資料を手がかりに―」『阪大日本語研究』31，pp.1-15，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

――――（2021）「読みがたりむかし話資料にみる存在動詞の分布」『甲南国文』68，pp.47-61，甲南女子大学日本語日本文学科.

――――（2022）「読みがたりむかし話資料にみるアスペクト形式の分布」『甲南国文』69，pp.左 2-15，甲南女子大学日本語日本文学科.

辻加代子（2009）『「ハル」敬語考―京都語の社会言語史―』ひつじ書房.

西尾純二（2015）『マイナスの待遇表現行動―対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮―』くろしお出版.

野間純平（2014）「近畿方言におけるネン・テンの成立―昔話資料を手がかりに―」『阪大日本語研究』26，pp.51-69，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

日高水穂（2013）「「昔語り」に現れる文末表現の地理的分布」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析　成果報告書　－言語地図と方言談話資料－』pp.13-32，国立国語研究所.

――――（2018）「昔話の談話構造と表現形式にみる地域性」『國學院雑誌』119-11，pp.217-230，國學院大學文学部資料室.

宮治弘明（1987）「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151，pp.38-56，国語学会.

（文学部　講師）